

「ごきげんよう」のアクセントを考える

—アクセント史研究の観点から—

加藤大鶴

1 「ごきげんよう」の2種のアクセント

跡見学園でよく知られた挨拶に「ごきげんよう」がある。女子大学ではめったに聞かれることはないが、中学校高等学校では今も授業開始時や、下校時にこの挨拶が用いられているという。そのアクセントは平板型（LHHHHH 型⁽¹⁾）に発音される。どうも古くから学内ではこのアクセントで発音されているようで、1967年に録音された学内教員の談話⁽²⁾からも同じ発音が確認される。ところが、跡見学園外部の者にとってはこれはやや奇異に聞こえる場合があるかもしれない。『明解日本語アクセント辞典』（三省堂、1958）『日本語アクセント辞典』（日本放送協会、1951）『日本国語大辞典（第1版）』（小学館、1972-1976、東京式アクセント）では「よ」から「う」にかけて下がり目を持つ起伏型（LH-HHHHL 型）が示されている。これらの最新の後継である『新明解日本語アクセント辞典（第2版）』（2014）、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）、『日本国語大辞典（第2版）』（2000-2002）においても、これは変わらない。したがって、一般には学園内でなされるのとは異なる発音が存在し続けている、といえる。すなわち、「ごきげんよう」には2つのアクセント型が現れることが確かめられるのである。

起伏型（LHHHHHL 型）…一般的な東京式アクセントの発音

平板型（LHHHHHH 型）…跡見学園で聞かれる発音

ところで、挨拶としての「ごきげんよう」は文献でどこまで遡れるか。『江戸語大辞典』（講談社、1974）には「ごきげん」が立項され、その下位項目に「ごきげんよう」が記載される。

- ①お達者で。お元気で。「天明七年・総籬「これはどなたかとぞんじました、ごきげんよふござりますか」②人と出会った時のあいさつ語。御機嫌よくいらっしゃいますか。お達者ですか。お元気でですか。安永八年・雑文穿袋「這一向は御見へなされませぬが、御機嫌よふ」③人と別れる時のあいさつ語。

よくいらっしやいまし。(中略) 明和七年・蕩子筌枉「もふ御かへりか、御きげんよふ御いで」(下略)

出典の『(通言) 総籙』(山東京伝)、『雑文穿袋』(朱楽菅江)、『蕩子筌枉』はいずれも18世紀・江戸を出版地としている。また『日本国語大辞典』(第2版)でも挨拶の言葉として「ごきげんよう」が小項目に立てられており、江戸後期である洒落本『甲駅新話』、滑稽本『東海道中膝栗毛』、明治期の用例として樋口一葉『十三夜』が引かれている。明治期の国定教科書にも出てくる⁽³⁾ことを考えれば、すでに当時一般的な挨拶であったことすら考えられる。日本語歴史コーパスCHJによっても、江戸期洒落本では「機嫌」+「良い(良う・良くを含む)」のつながりを持つ用例は25例あり、そのうち「ごきげんよう」の形が17例見られることが確かめられる。

「ごきげんよう」の構成要素「よう」は形容詞連用形ウ音便であり、本来は西日本方言に見られる言語的特徴である。西日本方言が近世後期に江戸で用いられることについては、いわゆる上方語が江戸語の上層方言に入り込みそれが後に広い位相で定着した現象として知られている。なかでも形容詞連用形ウ音便は「ござります」が後接する形で(松村明1953・小松寿雄1985:129他)現代まで化石的に残ったとされる。すなわち、「ごきげんよう(+ござります等の後接要素)」という表現が上方から借用される形で近世後期にすでに江戸に存在しており、それが挨拶化したものが明治期以降にも伝わったと考えるのが自然であろう。

他方、跡見学園における「ごきげんよう」という挨拶は、いつ頃から行われたものか。それを直接的に示す文献は管見の範囲では見つからなかったが、一三〇年史編集委員会2005:270には「ごきげんようについて」という小文があり、京都の御所で用いられた挨拶を、創立者である跡見花蹊(1840-1926)が学園に取り入れたと記されている⁽⁴⁾。跡見学園の創始者である跡見花蹊は大阪に生まれ育ち京都で御所に勤めたという(泉雅博・植田恭代・大塚博2018ほか)。そうであれば、関西方言の話者であったと考えてよいだろうし、事実卒業生の手記にも、そうであったことが記されている⁽⁵⁾。

花蹊の日記(『跡見花蹊日記』, 跡見花蹊, 花蹊日記編集委員会編2007, 原本も確認)を通覧すると、ただ一箇所「ごきげんよう」を用いている箇所がある。

朝五時より起て、準備齊い、予、李子、治子、幾子之四人同行、九時半発車。

送り来る者多く、御機嫌ようの声を残して出発ス。(大正6年10月5日)

学校の中で用いられた事例ではなさそうであるが、跡見学園の開学である明

治8年(1875)から少し間は開くものの花蹊が「ごきげんよう」を確かに挨拶として使っていたことが分かる。挨拶ではないとみられる用例には次の2例がある。

御機嫌よう御上りに相成候。(明治36年11月14日)

実に奉送の方々可驚御人数、御賑々敷、御機嫌よう御出発あらせられたり。

(大正11年10月2日)

日記は全般的に文語文で記されており「ご機嫌よく」+用言といった用例は頻出する⁽⁶⁾が、形容詞ウ音便が出てくることは珍しい。口語の現れと見ることができようか。

以上からすると、江戸=東京には近世からすでに上方由来の「ごきげんよう」という形式が持ち込まれ、少なくとも近世後期には挨拶として江戸の人々の人口に膾炙していた。それが江戸に持ち込まれた当初は京阪式アクセントに基づいていた可能性もあろうが、江戸=東京で発音されるうちに東京らしい発音に変容を遂げ、さらに何らかの事情で新たなアクセント型を生んだ、ということがまずもって推測できることである。また、上方から持ち込まれた「ごきげんよう」のアクセント型は、近代に至るまで江戸=東京において変化はなかったが、それとは別に跡見花蹊が身につけた上方の発音が明治初期に(当時の)跡見学校に改めて導入された、という可能性もひとつおぼえてみなければならない道筋であろう。

いずれにおいても近世から近代にかけての京都アクセントにおいて「ごきげんよう」がどのようなアクセント型で実現したかを確かめ、それが江戸=東京においてどのように受容されたのかを考える必要がある。そのうえで、それらと現代に伝わる2種のアクセント型に対応関係を見ることができるか、できるとすればどのようなプロセスをたどったのかを考えることになる。

2 「ごきげんよう」のアクセントを推定する方法

前述の通り、「ごきげんよう」の形でアクセント型を遡れるのは、1950年代の辞書までである。近代、あるいはそれをさらに遡る近世後期の文献にこの形でのアクセント型の記載を期待することは難しい。となれば、構成要素に分解してそれら単独のアクセント型を遡り、組み合わせて全体を推定していくほかない。「ごきげんよう」は接頭辞「御」+漢語「機嫌」+形容詞連用形ウ音便「良う」から成り立っているから、この歴史をたどれば良く、それによって近世か

ら近代にかけてのアクセント型を推定すれば良いことになる。

これらの構成要素のうち推定が比較的容易なのは「良う」のアクセントである。この語の終止形「良い(良し)」は日本語アクセント類別語彙表「金田一語類」にて、京都アクセントの変遷が明らかとなっており、これによれば京都における2音節形容詞「良い」類のアクセント型は、平安末期ヨシ・ヨキ⁽⁷⁾ = LF、近世初期ヨイ = LH、現代 = LHと変化したことが知られる。金田一語類は諸方言アクセントにおける語類の対応を重視し史的变化にも言及したものであるが、歴史上の文献資料を重視した早稲田語類(秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊 1998: 53-58)においても同様の変化を想定している。本稿で問題としている近世京都アクセントでは、近松浄瑠璃譜本に「ヨイ」LHと解釈される譜があるという(同: 259)。またその各活用形については、平曲譜本による上野和昭 2011: 397-413のアクセント体系に詳しい。これによれば、室町前期から江戸前期までの「良し」の各活用形のアクセント型は、終止形 LH・連体形 LH・連用形 HL・已然形 LHLであったとされるから、ウ音便を生じた連用形「ヨウ」も HLであったと考えてよいだろう。

では、残りの構成要素はどうか。実は漢語「機嫌」のアクセント型の歴史的変遷を推定するについては方法論的な課題があり、容易ではない。それは、漢語は元は古代中国語から借用されたものであり、日本語社会においては日常語化した一部の語彙を除けば上層方言のなかで用いられてきた歴史があることによる。すなわち知識音としての性格が根本的にあるために、和語のアクセント型と類同して変化したとみなすことに困難を伴うのである⁽⁸⁾。前述の日本語アクセント類別語彙表においても、通常は漢語を含めない。その理由の第一は、祖語からの分岐後に借用された恐れのあるものを事前に排除しておくことにある⁽⁹⁾。理由の第二は、漢語が知識音としての性質を持つことによる。類別語彙は語の日常的な使用を通じて記憶されたものであるから、馴染みの薄い語は対応関係をなさないことが多いと考えられるのである。早稲田語類はそのような中でも、その使用が日常語化したと考えられる中世以降を中心に漢語のアクセントを取り上げているが、やはり類別語彙の周縁に位置づけられていると言わざるを得まい。

漢語のアクセントを類別語彙の観点から正面に捉えた数少ない研究に、奥村三雄 1955・1974、金田一春彦 1980ab 他がある。これらの研究では東京式アクセントと京阪式アクセントの分岐が平安朝以後に起こったという立場から、それ以前に輸入された由緒深い漢語の多くにも和語同様に「類別語彙」を設定す

ることが可能であると提案されている。確かに和語なみに由緒深い伝統的な漢語は一部の仏教語や事物名等に認められ、それらの語は日常的な使用を通じて記憶されたと考えてよく、「漢語類別語彙」は実験的な意味で設定しうるだろう。いま奥村三雄 1974 に掲げられている漢語類別語彙表を見ると、3拍漢語の欄に3字からなるもの、2字（1拍+2拍構造・2拍+1拍構造）からなるものの合計204語が掲げられており、それらが7類に分けられている。本稿で問題としている「機嫌」は眉間類（52語）に記載されており、京都 HHH・東京 LHH・鹿児島 A⁽¹⁰⁾の対応が認められるとする。これは和語の3拍名詞・形類（第1類）に準じた対応である。ではこの類別案からただちに「機嫌」も形類（第1類）と同じ史の変遷をたどったと言えるだろうかといえ、この漢語類別語彙はそこまでの検証を経たものではないこともあって、文献資料を古代から近世にかけて実例に基づいて確かめていくのが良い。そこで、次節では漢語アクセントを文献から推定していく方法の若干の問題に言及しながら、そのアクセント型の変遷を見ていくこととする。

3 「機嫌（機嫌）」のアクセント

漢語のアクセントについて、現代語の辞書から知られるよりも古い時代にどのような型であったかを知るためには、漢語を構成する漢字が古代中国語から日本に輸入された当時、どのような音だったかを手がかりにすることが有効となる場合がある。その際、現代知られる漢語の表記が当時も同じであったかを調べなければならない。表記の違いは、往々にして漢字そのものの違いとなるからである。

いま「機嫌」の語史を知るに『日本古典大系 23 今昔物語集二』の補注が詳しい。これによれば、古くは「譏嫌」の表記であったことが分かる⁽¹¹⁾。字義通りから導かれる「そしり嫌うこと」の意味が初めにあり、そこから「事を行うしおどき」「形勢、事情」という意味が派生し（『日本国語大辞典』第2版）、「機嫌」の表記が生まれたことが述べられている。後述の図書寮本『類聚名義抄』等でも鎌倉期以前の文献には「譏嫌」の表記が見て取れ、古くはこの表記であったことが確かめられよう。

では「譏」「嫌」それぞれの単字の音はどうであったか。切韻系韻書である『広韻』によれば各字の反切は次のとおりであり、これによって各字の音が判明する（一般的な漢和辞典から知られる漢音・呉音の読みを歴史的な字音仮名遣いに

基いて付記した)。

譏…居依反 見母全清微韻平声 漢音キ 呉音ケ

嫌…戸兼反 匣母全濁添韻平声 漢音ケム 呉音ゲム

まず、唐代長安音を母胎とする漢音なら「キケム」、漢音輸入以前に伝わった呉音なら「ケゲム」と発音されたと少なくとも演繹的には考えられるから、現代に伝わる「キケン」という発音は第1字が漢音、第2字が呉音に基づく漢音呉音混読語と一応みなすことができる。第1字の声調は『広韻』から音節頭子音が全清(無気・無声)平声と分かるので、下降調であったと推定される⁽¹²⁾。第2字は呉音資料である保延本『法華經單字』九条家本『法華經音』で去声と分かるから上昇調であったと推定される。となれば第1字と第2字の組み合わせから、中国語原音を活かした「譏嫌」の音調は下降調+上昇調だったということになる。しかしこの組み合わせは1語のなかに音調の谷間を持つという点で安定性が悪い。このような場合、第1字の音調的特徴を活かして、第2字を低平調で実現する場合があることが分かっている(加藤大鶴 2018: 304 他)。このように考えると、(1) 下降調+低平調で実現したとひとまずは推定される。

ところが、平安末期に日本で成立した『類聚名義抄』では、『広韻』とやや異なる声調を伝えている。

譏…居依〈反切下字上声点〉反(観智院本・法上 56-7)

嫌…正嫌 或胡兼反(観智院本・佛中 12-7)

原撰本系の図書寮本では「譏嫌」が立項しており、ここでも第1字に同じ反切「音機 弘云居依反」(影印 93-3)が示される。反切下字の「依」は影母全清微韻平声であるから上声点が差されることは漢音の観点からは不審であるが、この声点を重く見れば(2) 高平調+低平調という組み合わせが推定される。

次に訓点資料や音義資料に目を向けてみると、「譏嫌」という2字ひとままとまりの単位に声点が記載されている例が散見する⁽¹³⁾。

「譏嫌」〈去声点+上声点〉○ケン(安田八幡宮蔵『大般若波羅蜜多經』⁽¹⁴⁾
卷第 54)

「譏嫌」〈上声点+上声濁点〉キケム 居依反 戸兼反(高山寺本『新訳華嚴經音義』⁽¹⁵⁾37オ-3)

「気嫌」⁽¹⁶⁾〈去声点+上声濁点〉キケム(前田尊経閣蔵三卷本『色葉字類抄』⁽¹⁷⁾下 063b-5)

『大般若波羅蜜多經』『新訳華嚴經音義』はいずれも仏典であり、その読誦音は基本的には呉音である(江口泰生 1986・榎木久薫 2003)。さて、『大般若波

『羅蜜多經』の〈去声点+上声点〉と『新訳華嚴經音義』の〈上声点+上声点〉とはどのような関係にあると考えられるか。これは元は上昇調（去声）+高平調（上声）だったものが、「譏」字が1音節で発音されたために上昇調を保持することができず高平調に変化したという音韻史上の事象を反映していると考えられる（奥村三雄 1957 他）。すなわち〈去声点+上声点〉のほうがより古い音調の組み合わせを示していると理解される。とすれば、これらの資料からは(3) 上昇調+高平調という組み合わせが推定される。

ここで平安鎌倉以前の諸資料から、「譏嫌」について3種の音調が仮に推論されるわけであるが、これらのうちいずれを選び取ればよいだろうか。まず言えることは(1)(2)は字書類に記載される声調を演繹的に組み合わせたのに対し、(3)は2字が組み合わさった単位に声点が差されている点で語としての声調としては信頼性が高い、ということである。しかしながら歴史上のある時点における声調の組み合わせを、漢語のアクセント型ないしそれを形成していく根拠としてよいかについては、やはり後代のアクセント型との間に対応関係を確かめていく必要があるだろう。

前節で述べたように、現代の京阪式アクセントではこの語はHHH型で発音される。アクセント史研究の教えるところによれば、和語の3拍名詞第1類（形類）に相当するこのアクセント型は、京都においては平安末期・近世初期・現代にわたって一貫してHHH型で発音されてきた。ここで改めて平安鎌倉期以前における「譏嫌」の推定音調と、それらが日本語アクセント体系下で実現した場合の推定漢語アクセントを示す。

- (1) 下降調+低平調 F + LH → FLL
- (2) 高平調+低平調 H + LH → HLL
- (3) 上昇調+高平調 > 高平調+高平調 RHH > HHH

これらについて現代の京阪式アクセントとの対応見ると、(3) RHH型から変化したHHH型がもっとも整合的である（RHH > HHHについては加藤大鶴 2018: 304のII群参照）。(1) FLL型はアクセント型としてあり得たかは考えにくい、その実現は(2) HLL型に統合されたと見るべきだろう（FLL > HLLについては同VII群参照）。HLL型は3拍名詞第3類（二十歳類）に相当するが、京都においては平安末期・近世初期・現代と一貫してHLL型である。「譏嫌」をこのHLL型に発音するアクセントは現代京都に伝わっていないが、近世初期（17世紀末期）大阪のアクセントを反映する近松浄瑠璃譜本にはこの型を反映する胡麻章がある⁽¹⁸⁾。

表1 文献から知られるアクセント型の整理

	院政・鎌倉	室町・江戸	現代
(1)	FLL > HLL		
(2)	HLL	HLL	(HLL)
(3)	RHH > HHH	(HHH)	HHH

以上を整理したものが表1である。() は文献資料から例を見つけれなかったが、もし存在していれば類別の観点からそうであったと推測される型を示してある。(1) (2) は漢音呉音混読語を由来に持つと一応は考えられる型、そして(3) RHH > HHH 型は仏典読誦音として伝承された呉音声調を由来に持つと考えられる型であり、2つの型が歴史上に併存したとみなすことができよう。結局のところ現代に伝わるのは(3)の型となる。

したがって、以上の文献資料に基づく検討から近世から近代にかけての京都における「譏嫌」のアクセント型はHHHである、と結論付けられる。

4 「御」 + 「機嫌」のアクセント

次に接頭辞「御」のアクセントを考えねばならない。『広韻』には、半倨反とあり、その字音は疑母次濁御韻去声であるから、その仮名音形は漢音でギョ呉音でゴとなる。この場合は呉音読みが該当するので、その声調を呉音資料に求めると保延本『法華経单字』・九条家本『法華経音』等で平声 = 低平調であるから、漢語アクセントとしてはLで実現したと考えられる。平安鎌倉期の資料からはそれを裏打ちする次のような例を確かめることができる。

御書 コシヨ 〈平濁上〉(『寂恵本古今和歌集加注』⁽¹⁹⁾)

御国忌 ココツキ 〈平濁平平上〇〉(『古今訓点抄』⁽²⁰⁾)

御禊 コケイ 〈平上〉(前田家尊経閣蔵本三卷本『色葉字類抄』下 010b-3)

御製 〈平平〉(同下 010b-3)

御菓 〈平入〉(同下 010b-4)

御覧 〈平平〉(同下 011b-6)

平安鎌倉時代に「御」 + 「機嫌」という複合がなされれば、アクセント型の組み合わせはL + RHH (> HHH) であるから、LHHH型で発音されたことであろう。

では近世ではどうかというと、「御」に後接する漢語との結びつきが強いも

のとそうでないものとで変化のパターンが異なるようである。例えば「沙汰」は平安鎌倉期では LL 型で発音されたことが分かっており（サタ〈平平〉前田家尊経閣蔵三卷本『色葉字類抄』下 051b-1）、「御沙汰」という複合があれば LLL 型で発音されよう。このような型はその結びつきが強ければ、LLL 型からの変化を経て近世初期には HHL 型で実現する（上野和昭 2011, 平曲譜本からの推定）。しかし「御免」の場合は事情が異なる。「免」は呉音資料である保延本『法華経单字』・九条家本『法華経音』等では去声＝上昇調であるから、「御」と複合した場合の漢語アクセントは LLH 型であったろう。この型は結びつきが強ければ近世初期には HLL 型に変化するはずであるが、平曲譜本からは LHH 型・LLH 型だったと推定されるという。これは「免」の平安鎌倉期の LH 型がそのまま生かされた形であって、要するに「御」と「免」が複合せずに近世初期に伝わりそれがその時代に改めて複合したと考えられるのである⁽²¹⁾。もっとも、「御」＋「機嫌」という複合を考えた時、上記のような懸念は考慮に入れなくとも良い。平安鎌倉期に L + (RHH >) HHH によって LHHH 型であったとして、それが結びつきを強くしたまま近世初期に至れば LHHH 型、結びつきが弱く近世初期に改めて複合したとしても、HHH 型は平安鎌倉期から近世初期にかけて型としては変化しないので、L + HHH → LHHH 型となって、どのみち同じだからである。

以上の検討から、近世初期の「御機嫌」のアクセントは LHHH 型であったと推定される。さらにこのアクセント型そのものは、近世初期をすぎると高さを後ろに送って LLHH 型、LLLH 型となっていくことが知られる。「御機嫌」の結びつきが緊密であればこの場合もそのような変化が想定されよう。

5 近世後期の江戸における「ごきげんよう」のアクセント

前節までの検討から、江戸に上方語が流入する頃の京都アクセントに基づく「ごきげんよう」は、次のような低起式のアクセント型になっていたと考えられる。

「御機嫌」LLHH (～LLLH) + 「良う」HL → LLHHHL (～LLLHHL、あるいはさらに高さを後ろに送って LLLLHL)

しかし『日本国語大辞典』に示される現代京都アクセントは高起式の HHHHHL 型であって、近世からの変化を説明するのが容易ではない。これはどのように考えればよいだろうか。中井幸比古 2002: 27 によれば、現代京都ア

クセントにおいては、「前部要素」が低起式でもその拍数が短い（特に1拍）場合には、例外的に複合語が高起式になる場合が多いという。『日本国語大辞典』に記載の現代京都アクセントは、この例外的な複合のケースと考えておきたい。ともあれ、近世後期における京都アクセントの「ごきげんよう」がLLHHHL型、HHHHHL型のいずれであったとしても、高さの下がり目の位置だけを区別する東京式アクセントに聞き取られれば、その実現は結局のところLHHHHL型に写し取られたことと推論される。

さて、結論に入る前にもうひとつ考えておくべき可能性がある。それは分節音としての「ごきげんよう」は上方語に拠りながらアクセントはあくまでも東京＝江戸のものだったというものである。「機嫌」が奥村三雄 1974 による漢語アクセントの類別が示すように3拍名詞第1類相当であれば、「ごきげんよう」が流入した当ても東京＝江戸における「機嫌」のアクセントはLHH型であったとみなすことに特段の困難はない。そして接頭辞「御」は秋永アクセント習得法則 92⁽²²⁾によれば、「原則として、もとの名詞が平板式ならば全体が平板式」とあるから、「御機嫌」はLHHH型であった可能性が高い。また、「良う」については、同習得法則 52によれば、形容詞連用形ウ音便形はすべて東京式アクセントの連用形に類同する。「良く」がHL型であればウ音便形もそれに類推してHL型になるという考え方である。つまりアクセントの面では借用を経なかったという解釈も可能であって、だとすれば東京式アクセントの体系的な力のもとでLHHHHLというアクセント型で実現していたという筋書きもあり得るのである。これらは現代東京における「法則」であるから、近世後期にこの通りにはそのまま通用しないかもしれないが、ひとつの推論の根拠に用いることは許されるであろう。

6 挨拶機能特化型としての平板型

以上、考えられるべき道筋を可能な限り追いかけてきた。いずれの可能性を考えても、近世後期の江戸において「ごきげんよう」がLHHHHLと発音されたものと考えられ、これが現代のアクセント辞典に記載される型と同じであることも考え合わせれば、この推論はそれなりの確度をもって妥当であると言えるだろう。では、跡見学園において用いられるLHHHHHという平板型はどのようにして生まれたのであろうか。冒頭に記した、跡見花蔭が京阪地方で身につけたアクセント型を跡見学園に持ち込んだという可能性も、ここまでの推論

から否定される。となれば、平板型のアクセントは近現代の東京（か跡見学園）で新たに生まれたと考えるのが順当であろうと思われる。

秋永アクセント習得法則 66 には「転成した語は原則として、もとのアクセントを生かす」としてその具体例の一つに「御機嫌ほう」（LHHHHL 型）を掲げている。すなわち単独で発音された場合の「御機嫌」が LHHH 型で「ほう」が HL 型であれば、それが複合すれば LHHHHL 型になるのだと解される。ただしその後には附則があり、『『只今！』『今日は！』などは、呼びかけの意が強く、尾高型のように発音される』と注されている。これは要するに「タダイマ（LHHH（L）」と語の末拍までを平らに発音する場合を示している⁽²³⁾。確かに「早（はよ）う」HLL 型を語源とする「おはよう」も平板型である。また「さよなら」を挨拶として単独で発音すれば平板型になるのに、「さよならの言葉」などと言うときは元のアクセントが生きて起伏型になることがある（『明解日本語アクセント辞典』1958・『新明解日本語アクセント辞典第 2 版』2014 ともに起伏・LHHL 型と尾高・LHHH 型を載せる）。

そう考えると、挨拶としての機能がより際立っていけば、歴史のある段階で平板型で発音されることもあったのではないか。跡見学園（特に中学校高等学校）では授業開始時の一斉挨拶、出会いの挨拶、別れの挨拶などがすべて「ごきげんよう」であり、長く用いられてきた歴史を持つようである。その歴史の中で、挨拶に特化された定型的な発音として平板型に固定化したのではないかと推測されるのである。もっとも、「ごきげんよう」を学内の挨拶に頻用する学校は跡見学園に限らない。他の学校での実態を観察することで、挨拶を介して起伏型が平板型化することの普遍性が確かめられるものと考えられる。

注

- (1) 以下、高く発音する拍を H、低く発音する拍を L で記述する。またひとまとまりのアクセント単位について～型と呼ぶ。この他文脈に応じて、H から L への下がり目がある型を起伏型、下がり目のない型を平板型などと呼ぶ。本稿の平板型については注(23)も参照のこと。
- (2) 「授業参観行っただけですって。そしたら授業の先生がいちゃいますと、あの一、起立つってお辞儀するんですね、その折にはこの学校の子みたいに「ごきげんよう」なんて言わないで、ただお辞儀して、その時にね…」(「井上八重先生を囲んで (2)」1967.6.10 録音のカセットテープ・花蹊記念資料館所蔵)。この他、1950 年代の卒業生からも同じアクセントであったとの談話を得ている。
- (3) 「武雄は、『おとうさん。おかあさん。ごきげんよう。みなさん。ごきげんよう。』といって、出て行きました。」(尋常小学読本八・国定読本第 1 期, pp.29-30) 国立国語研究所 (2018) 『日本語歴史コーパス 明治・大正編 II 教科書』http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_tai_syo.html (2018 年 12 月 5 日確認) による。

- (4) 「花蹊先生が御所に入入りされていた機縁で跡見でも使うようになったのです。」とある。
- (5) 「つい大きな声でふざけたりいたして居りますと折悪しく『どなたどすおさわぎやすのは』とお手をたたいて御師匠様が廊下をお通りになります」「(跡見のお塾)記録の会 2000: 18)、「花蹊先生は京都弁で話され (中略)『よう勉強おしやすなあ』とご機嫌よくお帰りになった」(同: 23) 他。
- (6) 「真に御道中別なく、御機嫌よく御東着にて、一同難有り候。(明治3年10月14日)」「(九時三十分、宮の御容体頗る御常の如く御機嫌よく成らせられて、先々安心いたしたり。(明治37年8月22日)」他。
- (7) 歴史的に連体形が終止法を得ていくので両活用形を示す。
- (8) 特に漢語輸入に近い平安鎌倉期の漢文資料については、外国語としての発音で読まれることが志向されることが多かったであろうし、当然日常語との乖離もそれ以降よりは相対的にあったと考えるべきである。
- (9) 服部四郎 1933: 42-43 「比較さるべき語は各方言に於て、祖語より直接受け継いだものでなければならぬ。祖語から分裂した後に他の言語より輸入した語や、他の方言よりとり入れた語は、除外しなければならない。」
- (10) 鹿児島のア類は次末拍を高くするアクセント型を示す。
- (11) 正徳六年刊『世説故事苑』の記載「律ニ息世譏嫌戒ト云フアリ、是レヨリ出タリ (倭鈔ニ訛テ機嫌ノ字ニ造多シ、己ニ梵網古迹鈔ニモ機嫌ノ字ナリ 支那ノ書ニハ皆譏嫌ノ字ニ作ル)」を引く。
- (12) ここでは通説とされる金田一春彦 1951 に従い、平声 (全清・次清字) = 下降調、平声 = (次濁・全濁字) = 低平調、上声 (全濁字を除く) = 高平調、去声 (上声の全濁字を含む) = 上昇調、入声 (全清・次清・次濁字) = 高平入破音、入声 (全濁字) = 低平入破音とみなす。またこれらの漢語アクセントとしての実現はそれぞれ2拍で実現した場合と1拍で実現した場合とがあるから、下降調 = HL/F、低平調 = LL/L、高平調 = HH/H、上昇調 = LH/R、高平入破音 = H、低平入破音 = L と記載する。
- (13) 検索の一部に小倉肇『続・日本呉音の研究 第三部索引篇 字音注索引 掲出字索引』和泉書院 2014 を利用した。
- (14) 東辻保和 1971・2007 に拠った。
- (15) 高山寺典籍文書総合調査団『高山寺古辞書資料第二 (高山寺資料叢書第十二冊)』東京大学出版会、1983 に拠った。
- (16) 『色葉字類抄』における表記「気嫌」は『日本国語大辞典』第2版によれば、「譏嫌」が「表情、言葉、態度にあらわれている、その人の気分のよしあし」という意味を派生するなかで得られたものとするから、声点は「気嫌」という漢字そのものの声調とは無関係と見てよいだろう。
- (17) 前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成 18 色葉字類抄一 三巻本』八木書店、1999 に拠った。
- (18) 坂本清恵 1987 に「UDD」(近松・小 35a7) とある。U は高い拍、D は低い拍をそれぞれ胡麻章に反映する。
- (19) 秋永一枝 1972 に拠った。
- (20) 注(19)と同じ。
- (21) 上野和昭 2011: 263 では、「接頭語『御』の場合は、『御前・御免』の2語においては、むしろ後部要素となった漢字のアクセント (いずれも呉音去声 LH) が強くはたらし、それに後から『御』(呉音平声) が添えられたというようなことはなかったであろうか。」としている。
- (22) 初出は金田一春彦監修『明解日本語アクセント辞典』三省堂、1958。数字は習得法則の項目番号を示す。

- (23) 秋永は「尾高型のように発音される」とあるが、挨拶の場合はそれが単独で発音されるのが通常であるから、それだけでは尾高型か平板型であるかは中和してしまう。単独ではどちらも平らな音調で実現する。本論文では「ごきげんよう」のLHHHHH型を平板型とみなしてきたが、語末まで平らに発音することを持ってそう仮に呼んできた。本来は尾高型と呼ぶべきであろう。

参考文献

- 秋永一枝 1972『古今和歌集声点本の研究 資料篇』校倉書房
- 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊 1998『アクセント史資料総合索引 研究篇』東京堂出版
- 跡見花蹊、花蹊日記編集委員会編 2007『跡見花蹊日記 第4巻』跡見学園 (WEB版 <http://www.atomi.ac.jp/univ/kakei/>)
- 「跡見のお塾」記録の会 2000『跡見のお塾』「跡見のお塾」記録の会
- 泉雅博・植田恭代・大塚博 2018『跡見花蹊：女子教育の先駆者』ミネルヴァ書房
- 上野和昭 2011『平曲譜本による近世京都アクセントの史的研究』早稲田大学出版部
- 江口泰生 1986『『大般若波羅蜜多經』読誦音について—資料の解釈と読誦音の変遷』語文研究 62
- 榎木久薫 2003「高山寺藏寛喜元年職語本新訳華嚴經の漢字声調について：保延本法華經單字との比較」鳥取大学教育地域科学部紀要。教育・人文科学 42
- 奥村三雄 1955「東西アクセント分離の時期—外来語のアクセント—」国語国文 24-12
- 奥村三雄 1957「呉音の声調体系」訓点語と訓点資料 8
- 奥村三雄 1974「諸方言アクセント分派の時期—漢語アクセントの研究—」方言研究叢書 3
- 加藤大鶴 2018『漢語アクセント形成史論』笠間書院
- 金田一春彦 1951「日本四声古義」『国語アクセント論叢』法政大学出版会
- 金田一春彦 1980a「味噌よりは新しく茶よりは古い—アクセントから見た日本語と字音語—」月刊言語 9-4
- 金田一春彦 1980b「服部博士へのお答え」月刊言語 9-6
- 小松寿雄 1985『国語学叢書7 江戸時代の国語 江戸語』東京堂出版
- 坂本清恵 1987『近松世話物浄瑠璃 胡麻章付語彙索引 体言篇』アクセント史資料研究会
- 服部四郎 1933『国語科学講座 VII 国語方言学 アクセントと方言』明治書院
- 東辻保和 1971「安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經の音注 (資料)」訓点語と訓点資料 44
- 東辻保和・岡野幸夫 2007「安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經の音注 (索引)」訓点語と訓点資料 119
- 一三〇年史編集委員会 2005『跡見学園——一三〇年の伝統と創造』学校法人跡見学園
- 松村明 1953「江戸語における語連接上の音韻現象：—浮世風呂・浮世床を資料として—」お茶の水女子大学人文科学紀要 4 (松村明 1998『増補江戸語東京語の研究』東京堂出版所収)

*跡見学園における「ごきげんよう」使用の歴史を調査するにあたって、跡見学園校友会 泉会および花蹊記念資料館にご尽力を賜った。記して心より感謝申し上げます。